

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：32612

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26560421

研究課題名(和文) 養育者と子どもの相互行為に現れる即興的な物語の特質と構造

研究課題名(英文) The structure and characteristics of the improvised narratives in the interaction between a care-taker and his/her child

研究代表者

大庭 真人(OHBA, Masato)

慶應義塾大学・政策・メディア研究科(藤沢)・研究員

研究者番号：20386775

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：養育者が子どもに対し「その時・その場」で目の前にある参照対象を物語る際、その対象が安定してそこにある/いるとは限らない。養育者が当初想定し語り始めた通りに参照対象が存在する場合、養育者は自らの語りかけを子どもの発話に合わせ、響鳴(resonance, 崎田2010)という先行する子どもの発話を自分の発話に取り込む文型を多用することにより参照対象への言及が観察された。一方、参照対象が存在しない場合には、参照対象を強く想起させるきっかけとなる対象に基づき発話を展開するという方略が取られていた。

研究成果の概要(英文)：When care-takers talk to their own children on a reference target, the target is not always guaranteed to be stable in front of them (e.g. A rainbow disappears. Or a bird will be gone.) If the target is salient in the situation, "Resonance" is a remarkable form in the care-takers' speech for early stage of children. If the target is not stable or salient, they use a cue or trace of the target for the association or the imagination for the target.

研究分野：子ども学

キーワード：教育的環境 状況起因的な語り

1. 研究開始当初の背景

養育者と子どもは対象を共に見たり、聞いたり、触れたりした経験を媒体としてコミュニケーションを行う。このような「その時・その場」のコミュニケーションは、養育者が子どもに世界を捉えるための文化的観点を伝え、子どもを当該社会の一員へと引き入れる重要な教育の場である(Bruner, 1983)。実際に、これまでの養育者と子どものコミュニケーションを扱った研究では、養育者が子どもの注意をどのように参照対象へ向けるのか、参照対象の共有がどのように社会的コミュニケーションの発達に寄与するのかといった点が論じられてきた (e.g., Tomasello 2008)。例えば、「絵本読み」「おもちゃ遊び」といった相互行為の場面では、養育者と子どもが共に注意を向ける参照対象が眼前にあり、それが互いの共有基盤を構築する強力な媒体となる。実際に、養育者と2歳児の発話は、その多くが「その時・その場」に存在するものについての語りであると報告されている(Adamson ら, 2006)。一方で、現実の環境下では、養育者が子どもに語りをする参照対象が、「その時・その場」に、「いない」(またはいることを視認できない)場合も多い(図1)。そういった「その時・その場」における参照対象の「不在」に対して、養育者はどのようにコミュニケーション上の方略を転換し子どもとの共有基盤を得ようとするのか、その転換が従来の語りにおける調整と質的にどのように異なり、どのように共通するのか、更に子どもの発達段階に応じてどのように変化するのかを明らかにする。

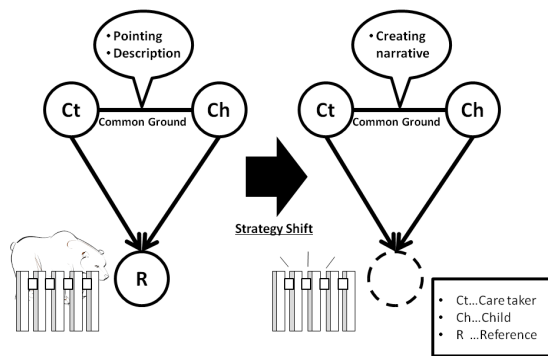


図1：参照対象の不在

2. 研究の目的

養育者が子どもに対し「その時・その場」で目の前にある参照対象を物語る際、その対象が安定してそこにある/いるとは限らない。養育者が当初想定し語り始めた通りに参照対象が存在する場合、養育者は指さしや視線配布などを用いて、参照対象に対する指示を子どもが利用可能な形で非言語的にも明示する。一方で参照対象が存在しないか、その存在が確認できない状況において、養育者は自らの語りかけをどのように転換し、何を子どもに

語るのかを探ることが本研究の目的である。

そもそも言語を含めた相互行為において参照対象が存在することを自明として、これまでの言語行為研究はなされてきたが、そういった参照対象が存在しない(もしくは存在すると確認できない)場合に相互行為が破綻するとは限らず、むしろ一定の修正プロセスや受容(Goffman, 1967)が働くと考えられる。そういった「不在」に対する修正・受容が発達過程においてどのように推移するのかは、参考となる先行研究となる知見が皆無である。更に、そうした相互行為が、言語的語りに基づくコミュニケーションとともにどのような転換として現出し、発達段階にどう影響されるのかは未知の問題である。特定の対象を参照しない即興的な物語構築過程を子どもの月齢横断的に分析することも研究目的である。

3. 研究の方法

(1) CHILDES のCHAT形式により記述された言語コーパスを用い、24ヵ月齢から48ヵ月齢までの子どもの発話と養育者との対話を記録したデータを用い、どのような語形を用いて子どもが発話を行い、それに対し養育者がどのような語形をどの程度、参照対象に用いられるのか、またどのような方略を用いて子どもに対し発話するかについて、分析を行った。この際に、分析の中心となるのは、書き起こしがなされた文字情報であり、語形や頻出語などについて、結果をまとめた。

(2) 一方で、(1)のような言語コーパスでは、発話がなされた状況や環境の記述が不十分であることが少なくなく、養育者との身体的な関係や参照対象の位置が不明瞭な場合も多い。そのため、特定の1名の子どもに対して、8ヵ月齢から24ヵ月齢までの間ビデオカメラを用いて、室内遊び・食事風景を継続的に約15分ずつ映像データ化しまとめた。「その時・その場」の相互行為が養育者と子どもとの間で展開され始めるのは、8ヵ月9ヵ月以降と考えられるため、8ヵ月齢をデータ化の開始時期とした。その際に養育者や子どもがビデオカメラの画面に収まるようにカメラを配置し、養育者の即興的な物語構築過程をデータ化した。

4. 研究成果

(1) 子どもの「電車きた。」という発話に対して、養育者が「電車きたね。速いね。」と応じるように、先行する子どもの発話をそのまま反復したり、その一部を変形しつつほぼ同一の表現を反復したりする表現のことを言語学においては、響鳴(resonance)という(崎田 2010)。これは、養育者と子どもの対話において、養育者が先行する子どもの発話を受けて、極めて広く用いる文型であり、先行する語を受けて発話するだけでなく、終助詞を加え、応じることにより、先行する子どもの発話に同調するとともに、その発話を

容認する構造になっている。さらに応じた終助詞「ね」で終了する同一文型に「速い」という新たな情報を加えることにより、同調・容認のみならず、先行する子どもの発話が拡張し頻繁に共起する語や修飾する語を提示する形を取っている。この響鳴現象について、Yurovsky ら(2016)は linguistic alignment という概念を用いて、大規模な親子の対話コーパスから分析を行っており、子どもが発話を開始する 12 ヶ月齢後から養育者は非常に頻繁にこの文型を多用し、その後単調に少しずつ用いる頻度を下げ、子どもが 40 ヶ月齢つまり 3 歳 4 ヶ月程度になると、大人を相手に用いる頻度のレベルまで文型の使用を控えるようになることを示した。このように、養育者は子どもが「その時・その場」において発した対象への発話を響鳴という形で、自らの応答として答えることにより、「その時・その場」に適した子どもの発話については強化することを行う。その一方で、「その時・その場」に適さない子どもの発話については、「ん?」「なに?」などの疑問文の文型で応じることにより、「その時・その場」の発話として顕著性の高くない発話であることを暗に提示しつつ、子どもへの興味関心を失っていないことを示すことにより、次の子どもの発話を促すことを試みる。こういった対話の構造において、参照対象(ここでは仮に A とする)が不在でありうるのは、子どもに強く参照対象 A を連想させるきっかけとなる別の対象物 A' が「その時・その場」に必要である。きっかけとなる A' から A への連想が自然であれば養育者は A' を A として受け入れ、子どもの発話に回答し、A' から A への連想が不自然であったり、A' 自体の顕著性が低い場合に、疑問文で応じるか、そもそも回答しない。これにより、子どもは養育者との間で A' A の連想に関する自然さの判断基準を暗黙のうちに提示されていることになる。

さらに、養育者が用いる発話方略に「ビリビリ」といった所謂オノマトペを多用するというものがある。オノマトペというのは、「その時・その場」において、子どもが聞いたであろう音そのものを転写する擬音語、「ザラザラ」「ピカピカ」といったように子どもが「その時・その場」で知覚しているであろう状況を記述する擬態語、「ドキドキ」「ワクワク」といった「その時・その場」で子どもが内的に感じているであろう心情を記述する擬情語の 3 種が知られている(秋田 2009)。ここで、養育者が戦略的にこれら 3 種を用いて、それらを感じ動詞のように用いる状態から、文内に副詞として用いるか、もしくは軽動詞化することで動詞として用いるように子どもの月齢に合わせて変えていくことで、「その時・その場」における記述をより鮮やかかつ日本語という言語に溶け込ませていく。

(2) 一方、収集した映像コーパスにおいては、子どもに対する養育者の発話と、両親

(つまり大人同士の対話)が、CDS(Child-Directed Speech)からのコードスイッチングされる形で展開される様が観察された。つまり、子どもを相手に養育者が話す場合には、ピッチを高くし、発話速度を落とすつつ、自らの発話を何度か繰り返したり、子どもの発話に響鳴する文型を多用するモードから、発話速度をあげ、簡略化した文型を用いるモードに切り替えることにより、子どもに回答していないことを暗に示している。これは、伊藤(2015)で述べられているように、家族内で交わされる会話において幼児はそこへの参与を常に承認されているわけではない、ということの証左であり、発話内容は「その時・その場」にない対象に言及している場合が散見された。こうしたスイッチングと参照対象の不在により、養育者は子どもが対話に参与できない状況を展開することで、子どもに参照対象と発話との関係を非明示化を非言語的に形式化している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

Saji, N., Wang, C., Hong, C. & Ohba, M. (in press). Context sensitivity in verb learning: Effects of communicative demand on organization processes in lexical development. 査読あり、Journal of Cognitive Linguistics.

齊藤都・佐治伸郎・廣田昭久(2017). 幼児の類推における自発的言語化の効果. 査読あり、認知科学, 24(3), 376-394. DOI:https://doi.org/10.11225/jcss.24.376

〔学会発表〕(計 4 件)

Imai, M., Saji, N., Asano, M., Ebe, M. & Ohba, M. (2017). The role of contrast in construct the lexicon as a connected system: from the initial mapping to later boundary delineation. the International Association for the Study of Child Language(IASCL). Lyon, French. July, 2017.

佐治伸郎, 王冲, 洪春子, 大庭真人. 語意の再編成過程における情報共有志向性の役割. 日本認知科学会第 33 回大会, 北海道大学 2016 年 9 月

齊藤都, 佐治伸郎, 廣田昭久. 幼児の言語使用による類推への効果. 日本認知科学会第 33 回大会, 北海道大学 2016 年 9 月

Imai, M., Saji, N., Asano, M., Ujihara, Y., Yasufuku, K., Ebe M & Ohba, M.

(2016). How young children construct the lexicon as a connected system: The case of color names. the 38th Annual meeting of the Cognitive Science Society, August, 2016

6 . 研究組織

(1)研究代表者

大庭 真人 (OHBA, Masato)

慶應義塾大学・政策・メディア研究科・研究員

研究者番号： 2 0 3 8 6 7 7 5

(2)研究分担者

佐治 伸郎 (SAJI, Noburo)

鎌倉女子大学・児童学部・講師

研究者番号： 5 0 7 2 5 9 7 6